

第3回こどもプロジェクト企画ボード

植物の姿・かたちを愛でることから始まる

自然への愛と家族の暮らし

ダイアローグ

参加者：

近田文弘 国立科学博物館名誉研究員

天野正子 東京女学館大学副学長

江藤裕之 長野県看護大学(外国語講座)助教授

土屋 薫 江戸川大学社会学部助教授

松田純子 実践女子大学生生活文化学科助教授

松田義幸 実践女子大学生生活文化学科教授・森永エンゼル財団理事

須賀由紀子 エンゼル財団主任研究員

森永エンゼル財団

①子どもを自然の世界に誘う考え方

【天野】自然体験をする場合に、まず大きなところから自然に触れる、風景に触れる、風景の中に自分を溶け込ませるということでしたが、最初にルーペを使ってミクロの世界に入ることも可能なのですか。

【近田】もちろんそうです。今日お話しした3つの観点は、順序ではありません。

【天野】シダ類などをルーペで見るのは、幼児でも可能ですか。面白さがわかるのですか。

【近田】可能です。お話ししたシダ類の面白いところは、虫のようにモコモコと動くところです。子どもたちは、それは喜びます。

それを見せるためには、東京の町中では「イヌワラビ」というシダを使うとよいでしょう。7月の末頃に成熟します。葉の裏を見ると、包膜が取れて、真っ黒い虫のようなものが付いています。その葉を普通の所に置いておくとだんだん乾いてきて、乾くとあのバネが作動してピクッと動くのです。幼稚園の子供たちならば肉眼で見えます。ルーペを使えば確実に見えます。

電気で温めるともっと早くなります。それから、長持ちさせるためには70%のアルコールに浸けておきます。ティッシュでアルコールをよくふくと、アルコールは乾きが早いですからどんどん乾きます。そうすれば、真冬でも見られます。ルーペは、100円ショップのもので十分見えます。



【天野】子供の認識能力の発達過程を考えると、むしろミクロの世界の方が幼児にとってはアクセスしやすい世界だと思います。一方の「風景をどうとらえるか」は、認識的な能力がかなり成長しないと、その世界に自分を置くことはできないのではないかと思います。

風景そのものは何にも語ってくれません。そこから、見る側がどういうメッセージ性を

引き出すかというのは、やはり高校生ぐらいにならないと無理ではないでしょうか。

【近田】中学生ぐらいかもしれませんね。

ただ、小学校低学年でも可能ではないかという気がします。大切なのは、やはりよい風景を見せることです。たとえば、富士山でも「ビューポイント」があります。そういう所に連れて行って、とにかくよい風景を見せる。そういうことから始めるとよいと思います。そして、地形的なことや、「あの森はどんな森かなあ」という話をしてやるなり、歴史の話をしてやるなり、という

格好で興味を引き出す。

思春期はそんなことをしなくてもよいですが、内村鑑三も札幌で思春期の頃に自然に触れたということが、その後の一生を左右しているように、思春期も大事で、そのときにすごくよい風景の話を聞かせてやるとよいと思いますね。

確かに小学校低学年では無理かもしれないが、それでもよい風景を見せることは大事です。やはり本物を見て、そこでの本物を見られるガイドがいて、自然を見せてやるのがすごく大事ではないかと思います。



【須賀】それは、親の方に、少しその気持ちがあればと思うのです。私も子供が小さい頃、保育園の送り迎えの道すがら、「きょう、夕焼けきれい」「きょうの月、すごくきれい」ということをごく自然にしてきたと思うのですが、小学生になって、「きょう、夕焼けきれいだね」なんて急に子どもの方から言うのですね。それはやはりそういう心に留めるという経験を何らかの形で暮らしの中で

やってきたから、そういうことを言うのかなと思います。

【近田】それはすごく大事ですね。

【天野】だから、風景の持つ教育力はおそらくあると思うのですが、風景を見ても非常に感受性の豊かな子供を除いてはなかなか深く感じることはできないときに、周りの大人が何らかの形で、風景の持っている価値をちょっと引き出してやるということが大事ですね。

【近田】そういう手だてをどこかで取ることは本当に大事です。

【天野】そうすると教育力になるのでしょうか。風景そのものは何の教育力も持っていないのです。

【近田】風景論的な見方で自然を見るということ自体が、日本ではまだまだやられていないようですから、やはりこれからそういう考え方を進めてやっていく必要があります。子供がどういう時に、何をみせ、どんな働きかけをしたらよいのかは、もっと真剣に考えられてよいと思います。



【松田（義）】私は米どころの庄内に育ち、稲の匂いを嗅ぎながら育ちました。今、その匂いや香りを嗅ぐと、子供の時が昨日のようにありありと思い起こすことがあります。匂いが記憶を呼び覚ます。ですから、音や匂いは総合的なものではないか。小さいうちからやはり自然と関わるよい経験はさせておくが大事なのでしょう。

【近田】嗅覚は、人間の五感の中ではわりあい原始的だと聞いたことがあります。原始的であるからこそ、強く残っているのかもしれませんが。確かに、匂い

は思い出と結びつきます。



【松田（純）】保育の勉強で、幼い頃の原風景論を学んだことがあります。やはり匂いやその時の気持、思いなどを一緒に含んだもの、押入の中の隅っこの匂いや、暗さ、狭さ、そういうものがやはり幼い幼児期にもちゃんと何かを残して、そして大きくなって、その時のことがよみがえったりする。それが成長、発達の中でどういう意味があるのかは、まだはっきりはわからないのですが、でも何かやはりそれが残っているということは、子供たちの感性、心をとくのにとすごく重要な意味があるのかなと思います。

それから、確かに子供たちは見ている高さも低いので、やはり、近くのものからだんだん遠くの大きなものが見えるようになっていきます。

【天野】子供はミクロの世界のほうが入りやすいかもしれない。そして、それが実体験につながるのだと言われたのは、非常によくわかります。

【須賀】小さな子どもには、動きがあるものが大切ですね。

【近田】植物は動きがあるものは非常に少ないのです。確実に動くのは先ほどのシダの胞子が唯一でしょう。やはり、小さな子どもたちには、植物よりは虫ですね。植物は動かないです。それから、植物はあまりにも多様で、その多様さになかなか取り付きにくいのです。ですから、植物への興味は、小学校4年生ぐらいから場合によってはすごく好きな子が出てきます。まず最初は動くものです。

【松田（純）】幼稚園の先生が「保育の中で虫は欠かせません」とおっしゃっています。

【近田】虫は本当に大事です。それから虫は捕って、残酷だと言わないで、バラバラにして、羽をむしってばらしてしまおう。子供はその体験が大事なのです。私自身子供の頃は、いまから思うとちょっと慚愧に堪えない、カエルを捕るのが趣味で、カエルでターザンごっこをしたりして、ずいぶんいじめました。しかし、それが実は大事ではないかと思えます。

植物に私自身が興味を持ちだしたのは、高等学校の時に生物クラブに入った頃です。私はそのときには魚が興味があったのですが、クラブの先生がたまたまシダが大好きで、山に連れていってはシダを教えてくれる。それがきっかけです。ですから、虫から入って、草にどこかで取り付けてもらうのがよいかもしれないですね。

それから、大切なのは、いい図鑑を身近に置くことです。簡単な図鑑もよいのですが、きちんと調べられる本格的なものが望ましいです。

②名前をつける・名前を知ること——自然に近づく第一歩



【江藤】分類には「ものを分ける」というのと、もう1つは「ものをまとめる」という二つの意味があるのだというお話が大変印象に残りました。そして、名前がわかるということは、その植物のことがわかってくる。ただし、名前だけで終わってはいけないというお話しでした。

われわれがいろいろなものに名前を付けていくように、植物学では植物に名前をつける。そのときに、植物の命名はある程度勝手にやるのか。あるいは何か特徴を見ながら、ある1つの法則のようなものに則ってやるのか。そういうところから名前を見れば何か思い浮かぶのか。つまり、名前と、それが指すものとの関連性はあるのでしょうか。

【近田】バクテリアや細菌類は、調べる実験法があって、ある方法で名前を付けます。ところが、高等な植物については、実験法はありませんので、どんな名前を付けてもかまわない。だれが付けてもよいのです。

ただ、世界中で通用する名前は別です。日本の名前はだれが付けてもかまいません。何の約束事もないのです。タンポポをダイコンと呼んでもよいのです。ところが、国際的には命名規約があって、その規約に則って名前を付けないと認められません。

分類学はヨーロッパから始まりました。もともと、国ごとにそれぞれの植物の名前があったのですが、世界中の植物に名前が増えて混乱してきた。人によって違った言い方では、お互いに通じないのです。それから、たくさん名前をつければ学者としてポイントが高く、何でもかんでも名前をつければよいという時代があった。それでは具合が悪くなって、規則が作られたのです。現在は、動物、植物、それぞれの国際規約があります。それに則っていればどんな名前を付けてもかまいませんが、発表したものが認められるか認められないかはまた別です。当然論争が必要です。

実はこれは非常に大事なポイントですが、分類学の一番大事な単位は「種」という単位です。しかし、「種」という単位は、実はだれも見ることがない。非常に抽象的な概念です。つまり、目の前にある「セイヨウタンポポ」には、確かに「セイヨウタンポポ」という名前がつくのですが、「セイヨウタンポポ」というものを取り出して、その概念的な「種」を提示しろと言われても、それはできないのです。つまり、そういうもの、概念なのです。これは、なかなか難しい。分類学者でないと、しかと納得いかないものです。

それから、「分類する」ということ自体が、実は人間の勝手な世界です。植

物のほうから「俺はセイヨウタンポポという種である」などと言っているのではありません。人間がその特徴を観察して、定義して、「これをタンポポと呼ぼう」と決めているのです。ことによると、私のタンポポとあなたのタンポポは、同じと思っているかもしれないけれども違うかもしれない。究極に言うと、皆、心の中にある。そういう面白いものなのです。

ですから、分類学は自然科学ではないという批判はそこから来ます。客観的なものでは規定されない。つまり、認識論です。認識の科学であって、自然科学のような手法で詰められない——たしかにそういう面はあります。しかし、分類学者は、自然科学的に「種」という単位があるに違いないという思いで、日々努力しているのです。しかし、ないのかもしれませんが。

最近、DNAの分析が非常に流行ってきました。DNAの配列を見れば生物の進化もわかるし、その間の類縁もわかるのです。人間でも、DNA鑑定で親子関係がわかりますね。ですから、DNAで分類するのが一番正確だという考え方があります。

けれども、1つの生物を認識するのに、DNAを測定しないと名前がわからないというのでは大変なことになります。ダイコンのDNAが、産地によって違ってくる。そうすると際限なく、こちらのDNAのダイコンとそちらのDNAのダイコンとは別々の名前を付けなければいけないという話になりかねない。

ですから、「名前をつける」ということは、そういうなかなか考えてみると難しい点があるのです。

【天野】社会学では「名前を付ける」ことは社会を秩序づける行為だと考えます。例えば、四つ足の動物に「イヌ」と付けます。そうすると、同じ四つ足でもネコやネズミと違うのだという識別、つまり分類になってきます。それから、色が黒くても白くてもブチであってもイヌはイヌなのだという「イヌ」という種でまとめる。そういうことによって、社会を秩序づけていく働きです。

【近田】分類学的にはそういう面もあります。

【天野】識別する。まとめる。ですから、子供に植物の分類学、名前を付けて、葉と名前を一致させて自分の記憶にとどめさせるというのは、何か共通性を自然に身に付けるための1つの試みかなと思います。

【近田】非常に大事なのです。実はDNAの話では全くなくて、自然物の生き物をどのように認識するかということなのです。

これは動物の話ですが、動物の分類学者が熱帯のある場所に行って研究したら、そこにいる原住民が識別をしている種類と、研究者の識別した種類はほとんど違わなかったという例があるのです。つまり、人間は、自然物を識別して、似たもの同士をまとめる認識力はすごく優れているのです。しかし、それを自然科学で解剖しようとする、いろいろ難しい問題になっていると思います。



【松田（義）】今日は目に見える物質の分類の話ですが、非物質のほうも実はまとめていくのが大仕事で、それが哲学の始まりだということです。ですから、植物で分類ができるようになると、それがすべての世界に応用が利くのではないかと思います。その時その時興味のあるテーマについて、分類と名前の能力を付けていくのは、他の分野においても有効だと言えますね。

【近田】そういうことだと思います。やはりよく考えることにつながるのです。

【江藤】国際的な共通な学名は1つのルールに従っているとのことですが、例えばエキスマーの人たちは雪を細かくするけれども、そうでない所はあまり細かくしない。魚をよく食べる日本人には魚に細かな名前があるけれども、そうでないところはあまり区別しないということがあると思います。植物の場合もそういうことは言えるのでしょうか。

【近田】もちろん一般的にはそうです。ただ分類学の立場で言えば、「種」を基本にして、これがA種なのかB種なのかは、世界中の研究者が鵜の目鷹の目で、「できれば分けたい」と思って見えています。「できれば分けたい」という発想でないと、分類学は進みません。

分類学者には、まとめ屋と分け屋があります。「種」というものを広くとらえて考えようとする人と、非常に細かく分ける人がいます。自然物をどこまで識別できるかということに凝ると、よくぞこんな違いを見つけられたということがあります。しかも、違いに意味がないとだめなのですから、その違いが何かは、やはり生き物の種類をどう考えるかということに関わってくるのです。

【江藤】植物の分類は、葉だけではなくて、全体を見るものなののでしょうか。

【近田】もちろんそうです。個体1個に名前を付けますが、少なくとも種という概念は、中身としては個体ではなくて、個体の集まりだという考え方です。どういう集まりかということ、世代を超えて遺伝子を交換できる、言ってみれば同じような子孫を作れるという集団だという理解です。

ただこれは動物の分類の概念に非常に影響されています。植物は必ずしもそれに合わないものがたくさんあります。例えばカキやサクラなどは、自家不和合性といって、自分のおしべとめしべでは絶対に種をつくりません。別の品種の花粉を持ってこないと子供ができない。いろいろな例外があります。

生き物の世界は、人間が作ったのではなくて、自然にそういうものができているのですから、やはりそれに即して考えていかないといけません。

【須賀】いま名前の話の関連で思い起こしていたことなのですが、木の中でも焚くとよい香りをする香木という種類があって、それを焚いて香りを嗅いで楽しむという文化は日本人にしか発達しなかったのだそうです。それは、日本人

の独自の自然観や死生観、宇宙観というようなものと関わって発達したのだそうです。それで香りを嗅ぐというときに、自分なりの名前をその香りに付けていくと、とても親近感がわいてくる。ですから、香木の香りを楽しむということでも、1つ1つどう名前を付けるかということが大事なのですが、だんだんと、いま自分が出合っているこの香りは、本当にたくさんある中のたまたま1つにいま出合っているのだという感じ方ができるようになったときに、名前を付けるのに一生懸命になるという話ではなくて、大自然の中のたまたまこの1本の木に出会えた喜びとか幸せとかというようなことを感じ取れるようになって、自然に対する関わり方がより深まるのだという話を香道の方から聞いたことがあります。

一生懸命名前を付けて分類するというお仕事は、どちらかというところ、人間が上に立って自然を分けていくというような感じがするのですが、それこそ大宇宙とか大自然の中に生かされている自分に出合っていく、その1つの手だてとして名前を介する、そういうもって行き方も大事なのではないかなと思います。

【近田】確かにそういう考え方も大事ですが、分類学はやはり相手をきちんと理解するために存在する学問なので、名前を付けるというのは相手をきちんと認識する、理解するという点では非常に大事な仕事です。名前を付けずに、全体的には自然というのはなかなか近付いてこない。両方いると思います。しかし、どちらかというところ、やはりいまの分類学は西洋的な分類学です。

ただ、日本でも江戸時代に本草学が非常に発達し、草に名前をつけていったのです。薬草からきています。

やがて、本草学から抜け出て博物学になり、江戸の後期は、日本もヨーロッパもほとんど同じぐらいのレベルに分類学が発達します。そういう素地があったので、江戸の末期、ヨーロッパの分類学、シーボルトなどを日本人が受け入れられたのです。

【松田（義）】先生はよく中国に行かれましたが、中国の植物と日本の植物と比較して、中国で学ばれたことはどういうことですか。

【近田】中国へ行くと日本の植物の元がとてもよくわかります。もともと中国で新しい進化をして、いろいろな「種」に分かれて、そのうちのごく一部が日本に来ているのです。生物が進化を遂げると、非常に多様なものに分かれる。多様性の高いところが進化した証拠になるから、そこが大事な場所になるのです。

③自然教育論 — まずは「大人」への働きかけから

【松田（義）】先生は今の日本の植物教育、または生物教育について、どのような問題をお感じになりますか。

【近田】一番ベースの感性を育てるとか、例えば名前に飛びつくというところの教育が全くないのです。そして、先端の研究成果をすぐに上げるようなところ

ろばかりに注目していますから、足下のない教育です。また、大学の研究の先端、生命科学の研究は、まさにDNAもどきの生物工学とか、すごくマイクロなところを研究しているのですが、それは相当工学的手法です。そうではなくて、もう少し生命の尊厳や、感性だとか、そういうところに密着したものが本当になくなりました。きっと日本の自然科学は立ち枯れすると思います。本当にベースを作っていないといけないと思います。

日本人の多くは、今、外の自然と切り離された中にいます。日本人はほとんど家に飼っているネコのようなものです。建物の中だけで育て、コンピュータのような人工的なものでやっています。私たちの世代といまの子供の世代では、子供のほうが自然に対する認識が非常に弱っていると思うのです。その弱っている分だけ、将来の日本の自然科学は伸び悩むと思います。いまこそ、無駄なような風景とか自然、植物などの教育をやらなければと思います。いつの時代もそうですが、片方で機械文明的なものが進みすぎると、必ずやはり別な面を補強していないといけないのではないかと思います。

【松田（義）】いま感性の問題の大切さを言われました。最近よく話題にするのですが、「心は病気をするものだ」という前提で、臨床心理学とか、精神科を学びたいという学生が増えている。しかし、実は文学こそ心の健康になくはならないものだと思うのです。

同じことで、本当に自然教育のあり方を真剣に考えるべきではないかと思うのです。例えば、体育の先生がスキューバダイビングで潜り方は教えるけれども、海の中の自然の世界を興味深く教えるということは教養として教わっていないのです。こういうことが全部に言えるのです。

やはりいま一番緊急な課題は、自然に心を向けて、人間の自然性をいかに取り戻すかという自然教育のモデルだと思います。

【近田】おっしゃるとおりで、私は寺子屋式の教育で、小さなところでもよいから、きょう話をしたようなことをしていくことは意味があると思います。

国立の博物館なども社会的にそういう部分を担っているのですが、なかなか孤軍奮闘で、「なるほどこういうことがいいのか」というところを見ていただけるまでできないのが現状です。むしろNPOや民間などの活動が刺激になるかもしれないと思います。

【天野】NPOなどを主役とした野外体験が活発に行われていますね。例えば春の田植えとか、夏の川遊びとか、秋の稲刈りとか、冬のしめ縄作りとか。ただそれは自然教育とまで言えるのでしょうか。

【近田】例えば、森で木を間引く作業をボランティアでやっているところがあります。木を切る作業は、手入れという視点で楽しいのです。ところが、それも単なる労働奉仕で終わっているのです。ですから、森の木を切ると森がどうなるとか、人と森の関係を考えようということには、指導者が必要ですね。

【天野】自然に関わる体験を自然科学的な目を育てる方向に結びつけていくことですね。

【松田（義）】学習の動機が高まっていくような、そういう仕組みですね。き

のような近田先生の話聞いた人と聞かない人では全然違ってきますね。

【天野】最初は自然の中に自分を入れて感じるだけで、いいわけですね。しかし、そこだけで終わってしまうのではなく。

【近田】そこはやはりそこでだれかその先にあるものへと道案内をする、そういうガイドがいるでしょうね。ですから、指導者の養成は非常に大事です。しかし、大学では細かい先端の研究に一生懸命ですから、指導者は育たない。ちょっと悪い状況ですね。



【土屋】先ほど来、親の関わり方が大事ではないかという話が出ました。それで、少し逆説的な言い方になるのですが、大人になってからそれまで経験していない自然への感受性を取り戻せるかということはあるのでしょうか。

私は東京育ちなのですが、大学以降、地方で過ごすうちに、わら焼きの臭いと秋の季節感というものを知ることができ、最近はまだ東京に戻ってきたのですが、この間地方に行ったら、「あっ、わら焼きしているな」と思ったのです。

そう考えると、大人になってからも自然への関わり方を深めることが可能なのか。可能であるならば、どのような方法が考えられるのだろうか。

子供の時期に豊かな自然体験を経験しなければ無理だというならば、都会が多くなった日本で育った親の子供の未来は悲観的になりますね。ですから、「成人に自然を感じる力を取り戻すキャンペーン」が大切ではないか。

その場合に、都会の中にいると、なかなか自然を見る機会はないのですが、それでも、町と自然をつなげてとらえられるような適切なスポットが、身近にないでしょうか。

【近田】すごくよい話ですね。先日、ある所で風景論の話をした時に、雪深い新潟で生活をし、雪にはいい思い出が一つもなかったという中年の方が、雪に対する考え方が変わった、とおっしゃっていましたが、それに通じるような話で、やはり歳を取ってからでも、そういう見方を理解できる人は実は潜在的にたくさんいるかもしれません。それはすごく掘り起こしていく必要があると思います。私も、今までそこまで考えなかったけれども、それはそうかもしれません。

いま自然観察会はとても流行りだそうです。特に男性が増えていると聞きます。定年になって、自然でも勉強しようかと大変熱心だそうです。ですから、それはやはりすごく教育しがいがあると思います。そういう人たちに楽しみ方を、こういう見方があるということガイドするという事は、とても大事なことになると思います。

それにとってもよい場所が東京のど真ん中にあります。それは皇居です。皇居

の本丸と二の丸は無料公開されており、たくさんの植物を植えてあります。それを、毎年毎年増やしているのです。1年を通して植物観察が可能です。ですから、よいスポットです。

私自身は、自然観察会をやってもむなしかなと思ったことがあるのですが、やはりきちんと考えてやれば、すごく大事な仕事につながっていくのですね。

【江藤】私も、植物に関しては、全くといっていいほど区別がつかず、木を見ても花を見ても、名前がわかるのはごくわずかです。本当に、あらためて子どもと一緒に学びたい気分です。

【近田】1シーズンもあれば相当わかってくるのです。秘訣は、聞くのが一番です。観察会はよいチャンスで、聞くのです。耳学が一番です。「自分で図鑑を見て確かめて知る」というのはなかなか難しい。聞いて、聞いたものであとで図鑑で確かめて、納得して、それで少しずつレパトリーを増やしていく。私の方法もそれです。いまだに見たことはないもので全くわからないものがあります。外国から来た植物は見当もつかないものがありますから。ただやはり自分の貯金、知っている貯金を殖やしていく。そういう意味では、人を知ると同じような感覚でよいのです。

面白いもので、最初は草のほうが覚えやすいのですが、だんだん草のほうが難しくなったり、それからある時に木の葉が皆同じに見えたりしてきます。最初は木は難しいです。草のほうが入りやすいです。ところが、ある時に木にも関心を広げますと、木は数が少ないので、100も覚えたらだいたいわかっています。

少し知っているものが増えてきたらズーッと増えてきます。植物は、人間と違って、場所によって葉の形もいろいろ変わりますが、そのポイントがわかってくると、また興味がわいてきます。クロマツと言っても葉の長さがまちまちでいろいろあるのです。いろいろだけれども、こいつはクロマツという奴だということがわかってくる。それほどかかりません。大変なことではないです。1シーズンとって、少しずつ増やしていかれたらいいです。

【松田（義）】私はモデルだと思うのです。最初のノウハウのポイントをつかめれば、自分でも広げていけるようになると思います。

【近田】樹木は1回行くと、相当覚えます。

【須賀】大人に向けてという話ですが、先日親子スポーツ教室に参加して、長距離でオリンピック選手だった方からジョギングのいろはを教わったのです。自分の身体への意識の向け方のようなことを教わったのですが、それはやはり大事なきっかけとなりまして、私はいまジョギングを楽しみにしています。つまり、大人がそういうきっかけをえてというのは、やはりいろはがあるのです。いろはを聞くと「そうか」とわかって、始めることができるのです。そして親がそういうスタイルを持つと何らか子供にも影響してくるというのもあるで、「大人に向けて」はとても大事なことだと思います。

【近田】そうですね。大人の人に理解してもらって、子供へとつなげていく。指導者を増やすことはとても大事です。立派な資格でもなくてもよいのです。

興味のある人を増やすだけでもすごくよいことだと思います。

【天野】自然観察というのは人との交流とか、文化的な交流とか、いくつもの交流がそこに重なっているように思いますね。

【近田】よい形で生かすことができれば、よい運動になるかもしれません。植物観察会は、ただマニアの人たちが集まって勝手にやるだけのものではないのだというものに発展していけば、よい社会的な機能を持つと思います。大人への働きかけは、なるほど大賛成です。

(文・構成：須賀由紀子)